

弘治司馬一印全集

第二十四卷



谷崎潤一郎全集 第二十四卷

定價二五〇〇圓

昭和四十五年七月三十日初版發行
昭和四十九年九月十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 高梨 茂

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一—
電話(五六一)五九二一
振替東京三四

初期小品

独の葬式

明治四十年三月「校友會雜誌」(第一高等學校) 第百六十五號

七月廿五日の朝五時、己は東京灣汽船會社に北村重七郎君の房州行を見送つて、采女町への歸路を俾で走らせた。

何しろ朝寢坊の男が其の日に限つて四時頃に他人から呼び醒されて、顔もろくに洗はず、飯も喰はずに飛出したのだから、未何だか眼瞼が張れぼつたい。口中では唾液がネチ／＼する。どうかすると居睡が出るので兩手で眼を擦ると睫毛の端にザラ／＼と眼脂が着いて居る。折柄の空はどんより曇つて、重々しい、下界に迫るやうに垂れ懸つた鼠色の雲が一面、斷目斷目には更に上の方に白雲が重つて見える。降雨の前兆であるのか曉から可厭に蒸暑く、懷の中迄湯氣を通されたやうである。汗襦袢と單衣との襟をキチンと緊めて着たので、尙更頸の周圍は燃え立つ程カツとする。いくら目を張つて力んで見ても、生暖い空氣が睡氣を催して、大川口にピーツと廣く、幽に、長々と響き渡る汽笛の聲を夢現の境に聞きながら、何時か／＼と前後不覺になつた。

突然車の心棒がガタンと鳴つて、泥隠しが一彈ね彈ねると、車が揺れて大きな自分の腰が一寸ばかり宙に浮いたのに、吃驚して眼を醒すと今しも車夫は高橋の袂を上るところ。節の多い凸凹の板の上を重さうに

俯向^{うつむ}いて挽いて行く。左に開けた大川から暖いとも冷いともつかない、思切の悪さうな、齒痒いやうな軟風が、袂を孕まして、寢惚面をひと撫でして通る。途端に眼と口と鼻とを一所にしてハツクシヨと噓を一つすると、其れを合圖と心得たやうに、車がもう一度、節にあたつてドンと弾ねた。

矢張房州へ行くのであらう。向ふから元尾君の弟が俵を飛ばせて來て丁度橋の中央で逢つた。今頃何處へ行くかと云ふやうな顔で己を視て居たが、未語も交した事のない、ホンの顔だけ知り合つて居る仲の事だから、何も云はずに御辭儀をしようか、止さうかと思案の體宜しく行過ぎようとする。寢惚面をあまりヂツと眺められるので少し耻しくなつて、後れ馳せながらテレ隠れに帽子を取つて、首を下げると、不意討に面喰つて、あわてゝ先方も會釋しながら通り過ぎたのは聊可笑しかつた。下り際にもう一度思ひ切つて弾ねて、餘勢で車夫は一段速力を早めつゝ、まだ人通りの少い、靜な河岸通を左へ曲りかける。

ワン、ワン、ワンとけたゝましく吠えると云ふよりは叫ぶ聲——其の時の聲は己の耳に確乎残つて居て、

今でも思ひ出せるが、人間ならば、熊谷堤にうら若い女坐頭が首を絞められながら、アレーツとでも叫ぶ時なのだらう。普通の犬のワンワンとは違つて、人間の殘酷と、我身の慘境とを天地に訴へる如き一種の悲鳴であつた。——に其方を向くと、今曲らうとする角の家の前で、白い大きな犬がもがいて居る。ハ

ツと思ふと其の背筋から頸のあたりを黒い棒が二三度閃めく。運悪くもがく拍子に隙をねらつて棒は見事に喉の骨をしたゝか打つた。犬はそれなりウンともスンとも云はず、體を横に、半ば仰向けに、四つの肢はもがいた瞬間の形を其儘、固くなつて往來へ斃れる。「可哀さうに」と云ひながら車夫も少し足を緩める。「ほつ、朝つばらから好い仕事だ」と云ふ聲に氣が付くと、太筋立つた廣い額とギョロ／＼怪しく輝

る眼の上へ、光澤のない髪の毛が蓬々と生ひ被さつた殘酷らしい男が居る。岩の塊の如き手に握つて居る樫の棒は、數百匹の犬の喉をつき破り、幾度かむごたらしい血の流れに染まつたのであらう、怨靈の念が凝つて固つて黒い罪惡の色に變つて居ても物凄しい。犬殺し!!と云ふ感が俄に起る。實際今迄己は犬と棒との他には氣が付かないのであつた。見ると他に又怪しげな一人が車を挽いて來て「よし來た!」と云ひながら車の蔽ひの莖を一寸めくると前の男が犬の前肢二本を攫んで無雜作に莖の下へ投げ込んで了つた。其の時己は死顔を何の氣なしに窺ふと、瞳が坐つて凄くつるし上つた眼がデツと己の方を睨みつけてゐるので、全身の血が一時に凍つたやうに總毛立つて思はず瞑目したが、胸の中は綿の塊のやうなものがもく／＼と湧いて出て一種いやあな心持になつた。あゝ可忌なものを見たと思つたがもう仕様がな

きれいに掃除をした箒木の目が簾の如くについて居る地面の上を、苦悶の餘りひき搔いたらしい四肢の痕が永劫の恨を含んで縦横に印しるされて居る外、一滴の血も出さず、彼は極めて洒つぱりした死方をしたのである。生物の命と云ふものが斯くも容易に絶たれる程脆いものかと思へば實に心細い。そしてまああの李が熟したやうに眞紅に充血して而も千萬無量の恨の色が何となくどんよりと赤濁りに濁つたあの眼はどうだらう。誰も颯殺しになつた死體の物凄さは想像が出來ようが此の眼玉の恐しさは見なければ解らない。

雪消の春の河水の勢で全身を走る血潮の流れを一時に止められ、生々しい肉々をたゞかれ、花の盛の生命いのちの精力ちからを瞬時にもぎとられて、むざ／＼と地の強い新しい美濃紙を横にひきさくやうな、傷々しい最後を遂げた此の犬が、若し一と思ひに喉を打たれて殺されず、皮を破られ、骨を碎かれたなら、肢からも、胸からも、腹からも瀧津瀬をなして淋漓と流れるであらう全身の血の、迸出するに所なくして顔中の二點に逆

上したのである。方一寸にも足らぬ面積の中に人を戦慄せしむる程深刻な色を現はしたものがあるとすればそれは此の眼玉である。嵩の大きい石に打たれるより細い錐で突かれた方が痛いと同じに、満身に現れた「悽絶なる最後」の恐ろしさより二點に集中した「惨死の怨」の方が遙に人をおびえさす。己は今たしかに錐で胸を突かれたのである。

あの眼はどうして己を睨んだらう。人間と云ふものは弱い獣を屠つて自分の懷を肥やす殘酷な動物だから、殺された以上は己の方から人間中の弱蟲に祟つていぢめてやらう。此の眼で睨んだが最後、一生其奴は己に呪はれたものと思へと草葉の陰から決心して居る所へ運悪く來合はせた己が注文通りの弱蟲であつたのだ。己は何處へ逐げて行つても到底あの眼玉を忘れる事は出来ない。飯を喰ふ時、便所へ行く時、寢床へもぐる時、夢を見る時、彼奴は執念深くついて廻るであらう。

恚う云ふ所を見ると熟々思ふが、己も他人に殺されたり、自殺したりするやうな苦しい最後はとげたくないものだ。とても死ぬなら暖い郡内の布團にくるまつて、清淨な純白のシーツの上で天井を見ながら嬉しい人に介抱されつゝ樂に往生したい。あの犬のやうに惡黨に追ひ廻されて、土の上を呻きながら逃げ走つて、悶え叫びつゝ空を掴み赤い目を出してキヤツと云ひながら……あゝいやだ、いやだ、思つてもぞつとする。もう考へるのは止さう、止さうと思つたが矢張止せない、自分でそつと喉骨の高い所を觸つて見る。此處を打たれたらどんな具合か知らんと思つて一寸押して見る。急に緣起の悪い眞似をしたものだとか付くと、朝つばらから恚んなものを見たり、自分でその眞似をしたりなぞするのも何か身にふりかゝる災難の前兆であらうと考へられてひどく心配になつて來た。

いつかもう俵は本願寺の傍を走つて居る。眼は全然冴えて睡氣などは疾うに飛んで行つて了つた。無神経な車夫は威勢よくガラ／＼／＼と采女橋を馳せ下りざま、一町程を瞬く間に駆けつて北村家の玄關へ俵をつける。己は始終此の北村家に宿つて居るのである。もう犬の事は忘れようと心で決めて闕を跨いだ。奥様はまだ寢て居る。女中は既に起きて臺所の釜の前でパチ／＼と焚き付けて居た。

朝飯の膳に向ふと、赤いやうな、褐色のやうな味噌汁のどろ／＼したのがどこか例の血の色に似て居る。ハット思ふと二つの眼玉が碗の底から自分を睨みつける。困つたものだ、今日は終日こんな思をするのか知ら、今日ばかりならよいが長くつゞけば取殺されて了ふ。それでなくても今日中に己の命がなくなりさうな前兆があるからなるべく少しの危険にも近寄るまいとして居る所なのだ。

晝になつても飯が喰へない。然しもうあと半日無事にさへたてば此の一日は事なく済むのだ。今から晩の十二時迄に己の身にふりかゝつて来る災難がなければ己も少しは安心が出来ようと思ふ。明日から外へ出てもなるべく犬を見ぬやうにするに限ると決心した。

それにつけて氣になるのは、實は北村の奥様は大の犬好で上等の牝の狎が一匹飼つてある。幸と此の頃は上野の別宅へつれて行かれて此家に居らぬからよいが、又ぢきに歸つて来るに違ない。己だとても今の今迄犬は大好であつた。小供の時分に大きな山犬に喰ひつかれた當坐は嫌になつたことはあるが、少ししたつたら再可愛くなつて了つた。それでその狎も己とは大の仲好で、己の云ふ事なら何でも聽いて側へ寄つて來ては戯れたが、もうこれからは見るも嫌だ。若し狎が采女町へ歸つて來たらどうしよう。屹度狎の魂へ例の眼玉が乗り移つて己を悩ますに違ないのである。これ程心配しても、唯獨腹の中でやきもき思ふば

かりで誰にも話さなかつた。話したら男らしくもない憶病なと笑はれるに極つて居る。

十二時も過ぎて一時になつた、まづ今迄は何事もない、早く夕方になつて、薄暗くなつて、燈がついて、夜になつて、眞暗になつて、寝て了へばよいと思ふ。すると一時半頃牛乳屋の耕牧舎から奥様へ電話で「牝の狎の種のよいのが見當りましたが、御宅のと配合させては如何でございます。子供が生れたら皆差上げて宜しうございます」と云つて來た。兼ねてより恰好な相手を探して呉れと頼んで居た事だから奥様は大喜びで「それは何よりだから是非午後六時頃に采女町へ牝を連れて來て下さい、Hちゃん（自家の狎の名）も其れ迄に上野から連れて來ますから」と答へてやる。あゝHちゃんは歸つて來るのである。案の定災難の端緒が開かれた。犬の死顔が天井の隅の方で「それ見ろ、己の妄執の絆でHをこゝへ手繰りよせてやるわ」と云つて居るらしい。

「貴郎は犬が大好だし、Hちゃんとはお馴染で、上野へつれて行く時も貴郎に願つたのだから、今日も一つ上野からHちゃんと相乗りで歸つて來て下さいな。狎の媒介^{なかうど}なんてちよいと洒落てるぢやありませんか」奥様は己の心も知らずに無残にもこんな事を云ふ。何が洒落て居るものか。恐ろしや奥様の身にも眼玉が乗り移つて居るのであらう。

勿論己は二三度斷つたが狎は貴郎と一所でなければどうしても暴れて車へ乗らないのだから是非と頼まれる言葉に、己むを得ずとう／＼行く事に承知した。抵抗すべからざる怨念の力が奥様と己との間に作用して居たのに違ない。

午後二時家を出て上野行の電車に乗つた。これから己は危險に近よりつゝ死地に赴くやうな氣がする、上

野の宅へついてHを見るだけでも一と通の苦勞ぢやない。氣の所爲か電車の中の乗客が皆犬面や狎面で、暗に己を嘲弄して居る如く見える。

着いて見ると南無三!!これは大變である。Hちゃんは此の間から心臟病を起して、毎目下谷の久保野と云ふ獸醫に診察してもらうて居るとの事であるが、今日はとりわけ容態が悪く、

「餘程危篤でございます。このやうな好い狎程、體質が弱く、殊に犬の斃れますのは多く心臟病でございますから、御用心なさい」と云はれたさうだ。成る程人間でも佳人は薄命で才子は多病と相場がきまつて居るから、Hちゃんも矢張其の佳狎薄命の方なのかと思ふと大に可哀さうである。平生ならば己を見ると飛んで来て、膝へ上つて、頬や、唇や、頬にキツスして、舌と舌とでなめ合ふのだが、今日は體を起す力もないらしい。女中に聽けば此の二三日來何も喰はずに水ばかり飲んで居るのだと云ふ。

眼玉の一件が再び猛烈に胸裡を騒がす。同時に「死にはしまいか?」と云ふ考が電光の如く心の奥でピカリと閃いたが、強ひて其の閃きを見まい見まいと心の内部に對して眼を閉ぢた。「御覽の通りでございますから、御婚禮は若旦那の御全快をお待ち遊ばしたらいかがでございます。」と女中は笑ひながらそれでも氣づかはしげに云ふ。一應尤の説に取敢へず奥様に電話で問ひ合はせると、少し位の病は關はぬから是非今夜と云ふ之はまた熱心な答に、己むを得ず支度をしかけるとHちゃんの様子が益悪く、他から見ても如何にも苦しうになつた。「ねえ貴郎、こんんで連れて行つても宜しうございますか知ら」女中は頻に氣兼ねする。「それでは何卒醫者に問合はせてからになさりませ」と強ひられて據所なく電話で久保野に問合はせると、「どうして、どうして、あのやうに疲れて居る所を飛んでもない事」と返辭された。かう

なると無鐵砲も出来ない。思ひ切つて今日はあきらめるとして、再び奥様に其の旨を通じ、やうく納得させて電話室から歸つて來ると、女中が部屋の中で眞蒼になつて居る。

「何だかHが可怪しいんですよ。先刻から隅に臥たなり呼んでもちつとも動きませんの。氣味が悪いから視て下さいまし」この一言に己は胸をビクリとさせて、不安の念を抱きながらHの方を恐る／＼視た。早や薄黒い夕暮の色が、西洋間の四隅に生れ出で、其の黒い夕の色の精かとも思はれる蚊の群が、恰濁水の底に子の湧くやうに、何時とは知らず、隅々からブーン、ブーンと蒸し暑い空氣に音を立て、事ありげに飛ぶ。有聲名狎だけあつて、病にも衰へぬ純白の毛の色澤は、刻一刻と四方より迫り來て蔽はうとする夜の幕をかきわけおしのけるが如く、際だつて見える。然したゞ白く見えるばかりで動いて居るか、呼吸して居るか、眼を開いて居るか殆分らない。思切つて更に一步近づくとやうやく顔の輪廓が分つて來た。體は少しも動かさない。「H」と呼んでみようとしたが喉がひつついて急に聲が出ない。何とも云へぬ臭氣がブーンと鼻を撲つ。騒ぐ胸を押し鎮めながらジリ／＼と寄つて見ると光失せた瞳はバツチリと開いたまゝ、早やあらぬ方を指して動かない。濕を帯びてヒク／＼して居た三蓋松のやうな恰好の可愛い鼻はすつかり乾いて、大方死ぬ迄喘いで居たのであらう、口から半出した舌の尖は青味が、つた桃色に變つて居る。「Hどうした」やつと之だけ喉からしぼり出して、腋の下へ手を入れてみると、噫！早や冷えて固くなつて居る。突然犬の死顔がギョロリと眼前にちらつく。胸の中は亦いやな塊がもく／＼と立ち塞つて、背中の皮膚にヒイヤリと氷をつけられたやうな感が起つたと思ふと、それが漸く擴がつて手の端から頭の毛孔まで寒くなつた。

「可哀さうに、死んでしまつたのだ」。「えー死にました、眞箇に？まあ」女中はあをい顔を更にあをくする。

「あゝいやだ、妾は戌の年なんですよ。飛んだ所で死なれちまひましたねえ」さう云はれると己も戌だ。女中は三十三の戌で、己は二十一の戌、而も今朝から犬の死ぬのを見るのは二度目だ。二度ある事は三度あると云ふから今度は戌の年の己がやられるのぢやなからうか。氣味の悪いを通り越して恐ろしくなつて来る。いつ迄かうしても居られぬから、先づ奥様に知らせると、「死體をつれて來られても仕方がない。幸寺は下谷だから何卒今夜中に葬つて來てくれろ」との頼、乗りかゝつた船でしかたなく、早速五軒町の棺桶屋へ赤兒用の寢棺を買ひにやる。庭からローレルの葉をむしつて來て、其を下へ敷いたがさて入れるとなるとさすがに己には出來なかつた。男を呼んで收めさせて蓋は釘付にした。之れから愈葬むりに行くのである。

俤へ乗つたのが夜の七時、寺は龍泉寺町の西徳寺と云つて、以前の畜犬を埋葬した墓石がある筈だから、其れへ一所に入れるつもりである。朝から曇つて居た空は雨になつてポツ／＼と降る。日はとつぷり暮れて人げ少い樹立の陰物慄く、何とはなしに心細い。膝の上に置いた棺桶は何だか暖いやうな氣がして、今頃蘇生して中でもがいて居るのではなからうかと思ふ。一と月程前、采女町から上野へ連れて來る時は、俤の中で散々暴れて、往來の犬を見ては吠えて困つたが、僅の間に斯かる有様で寺へ運ばれるとは、思へば測り難き運命である。蔽ひの衣呂の隅の薄暗い所を視て居ると、朦朧と亘ちゃんの顔が現れて、其れが齒をむき出したり眼を丸くしたりして居る中に何時か眞紅の眼玉と變つて己を睨みつける。あわてゝ視線

を外らすと矢張ついで廻つて其處の黒闇から顔を出す。犬の怨靈が己を取り殺す氣なのかも知れぬ。然しHの生前己は彼に慘酷な事をした筈はないから大丈夫だらう。現に婚禮の媒介から葬式の施主に早變りする位の親切があつたら、畜生と雖有難く思つて宜い譯だ。それでも己は今晚屹度何かあるに相違ない。H同様心臓が悪いから麻痺でもするか。平生大酒をのむから卒中でも起すか。其れとも惡者にでも殺されやしまいか。まさかと思ふが戌の年の己が日に二度も犬の死目に遇ふ所を見ると何か不吉な事があるに違ない。

Hちゃんの心事も思ひやれば不憫なもの、彼はまだ今年四歳の小兒だ。體は少し狎としては大き過ぎたが、毛の艶に至つては優に誇るに足るもので、緋縮緬のちやんちやんを肩にかけて奥様に抱かれながら、往來を通るとみんな振りかへつた。己のやうな野暮な書生が抱くと少し武骨だが、それでも此の夏一所にカビネで寫眞を撮らうと思つて居た。

よく人間の醜い面相を評して、狎が噓したやうだと云ふ。極めて痛快適切な批評だが、狎として見れば矢張あの顔がよいのである。人間の美貌は眉は三日月、額は富士、眼パチリ鼻筋通つて、口元しまつたと云ふのだが、狎の顔の價値は寧ろ其の眼なり、口なり、鼻なりの形狀地位の破天荒に奇抜突飛な所に存する。吃驚して呆れたやうに大きく開いて、顔の上部を残らず占領して居る兩眼の下にくつついて、小ひさく坐りこんでヒコついて居るのが鼻だ。噓する時は先づ中央の鼻から活動が始まつて、其の下の口を押しかゝると眼は鼻の上へ引きつけられて、丁度兩眼の間へ鼻が無理におし割つてはいる。そこで滑稽な顔が一層滑稽になるのである。Hちゃんも狎としては中々の好男子で、殊に今夜は華燭の典をあげて、絶世の好男

子が稀代の美人と結婚しようとして、あへなくも死ぬとはどれ程残念だらう。思ひやるだに涙の種だ。前の衣呂を少し下げて外方を見ると、俵は大佛の下を竹の臺へ出て、博物館につきあたり、右へ兩大師と札の立つた坂を下りかける。浅草公園の方には灯の影がちらちらして沖の漁火のやう、つい右側を見ると大きな松の木が枝をぬつと出して俵ごと己を一呑にするやうな形。坂を一氣にかけ下りて踏切りを超えると、賑かな坂本通へ出る。氣が付いて呉服屋へ寄つて金巾の大幅を眞四角に切らして買つた。

坂本通を眞直に細い泥濘を好い加減ゆくと右へ廻つて、又左へ折れると龍泉寺町の西徳寺へ出た。門前で例の金巾に棺桶を包み、正門をあけさせて俵を入れる。門番の部屋も本堂も事務所の玄關も、悉く閉つて灯影も洩れず、闐然とした黒である。御影石の上を車の轍がいかめしくキリ／＼と鳴つて「今晚は、北村でございます」と云ひつゝ車夫は玄關で車を下した。

「おーい」と云ふ寢ぼけた聲の返辭が戸を隔てた幾間のあなたで聞える。と程なくガタガタと音がして戸が開く。俄に濡れて立つて居る玄關側の柳の黒い幹を灯の光が縦に流れて、泥濘の赤土の上へ朦朧たる火影がうつる。見ると手ランプを持った坊主が式臺に出て來た。どす黒い顔が下から照らされて、太い口髯の眞黒な影が逆に、瘦せた頬を蔽うて居る。光線は凹凸の段鼻の筋を傳はつて、圓々とした兩眼に反射し、其の上のゲジ／＼のやうな眉毛のかげを額の半に印する。ランプを動かす度毎に顔の影がいろ／＼にかはる。鼻筋を境に左右が陰陽二面に分れたり、般若の面のやうになつたり、團十郎の暫の隈取り見たやうになる。

「誠に夜中伺ひまして恐入りますが、實は愛育して居りました狎が今夕死去致しましたので、………何分

時候が時候でございまするし、長く置いてもおかれませんでしたので、取り急ぎ焼かず其の儘持つて参りました御座います。たしか以前飼犬が死にました節に、葬りました墓がある筈でございますから、何卒今夜中に御手数ながら御埋葬を願ひたう存じます」「左様でございますか、では奥へ参りまして話を致して見ますから、少々御待ちを願ひます」坊主は手ランプを持つた儘行つて了つた。六疊の玄關はまた黒闇となつて、金巾に包んだ棺桶ばかりがうす白い。丁度夕方部屋の片隅で雪の様な毛の亘ちゃんが横になつて居た時、こんな風に見えたと思つて居る中に、自分の目がX光線の作用でもするのか、棺桶を透き通して閉ぢこめられて居る亘ちゃんが見えるやうな氣がする。窮屈さうに四つ肢をたゝんで恨めし氣にヂツと己の方を見て居る。やがて今度は坊主が行燈をさげて來て其處へ置いた。覺束ない光が二三疊の疊と、黄褐色の壁へにじみ込む。節だらけの天井に燈心の影が、圓い火の輪をなしてうつつて、風のまに／＼大きくなつたり、小ひさくなつたりしながらフワ／＼と軽く揺ぐ、何となく亘ちゃんの魂魄のやうに思はれる。

「誠にぶしつけな御話で申兼ねますが、遠慮のない所を申し上げますと、實は御承知の通り夜分ではあり、雨も此の通り降つて居りますので、それに土葬となりますとあの墓石を全然どけまして、三尺位は掘らねばなりませんから、是非今夜といふ事になりますと、寺男の方では一人五十錢づゝ頂きたいと申しまするので、二人がゝりでございますからつまり一圓おやり下さいますやうにお願い申しますがいかゞでございませうか。」

「折角持つてまるつた事ですから、是非さう願ひませう、それから猶一つ、どなたかに御讀經を願ひたう存じます。葬りましてから墓前でなすつて下さいまして、唯今でもどちらでも御都合で宜しう御座いま